

# 英 語

堀 井 洋 一

## 1 英語における見つめ直しのある聞き合い

コミュニケーション能力の基礎を培う

三つの側面

※1 ESL  
English as a Second Language  
第二言語としての英語

※2 EFL  
English as a Foreign Language  
外国語としての英語

「英語表現への  
気付き」

「異文化や他者  
への思い」

本校の英語の目標は、「コミュニケーション活動を通して、英語への関心を高め、聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を培う」である。ここで、述べる「コミュニケーション能力の基礎」とは、1「英語を手段として自分の意思を伝える」2「相手を尊重し、温かな人間関係を作る」3「将来、学ぶ様々な言語の基礎としての英語を獲得する」という三つの側面をもつ。具体的な児童の姿として、「英語表現を聞いたり話したりする姿」「英語表現を活用し、他者とかかわり相互理解を深める姿」「獲得した言語や異文化への興味をさらに深める姿」と表すことができる。

本校の英語の目標にせまるためには、小学校英語教育の考え方の二つの立場「英語スキル重視」と「国際コミュニケーション重視」の両面をバランスよく学習活動に組み込むことが大切である。教師やALTが話す英語や外国の生活や文化にふれたりすることにより、子どもは日本語との表現の違いに関心を示し、英語表現を「聞いてみたい 話してみたい」という思いをもつ。さらには「(自分のことを伝えるために) 英語を使ってみたい」という意欲をもつ。

本校の英語では、英語表現を聞いたり伝えたりするなかで、英語表現への興味を高め、異文化理解や他者理解を深めることを「聞き合い」と定義する。英語そのものがコミュニケーションツールであり、日本において英語はESL<sup>※1</sup>ではなくEFL<sup>※2</sup>という点から、外国や異文化に興味をもつ窓口となる。また、英語表現にふれることで、子どもに「聞いた・言えた」「相手のことがわかった」「自分のことを伝えられた」という満足感(=楽しみ)が起こる。

また、英語における「見つめ直し」とは、英語表現に「ふれる・慣れる・活用する」(=「受けとめ合い」)活動の中で「英語表現への気付き」(以後、「気付き」と表記)や「異文化や他者への思い」(以後、「思い」と表記)をもつことである。コミュニケーション活動を通して、新たな英語表現に気付き、言語や文化、自分と他者との比較から、異文化理解や他者理解を行う。以上の点から、英語における「見つめ直しのある聞き合い」を次のように定める。

慣れ親しんだ英語表現を 自己表現をするために活用し 新たな英語表現に  
気付き 異文化や他者への思いをもち コミュニケーションを楽しむ姿

## 2 見つめ直しへと向かう状態

### (1) 新たな英語表現にふれる状態

戸惑い  
置き換え  
混乱

これまでにふれたことのない英語表現を聞いたとき、英語表現に戸惑いながらも、日本語や知っている英語に置き換えてその意味を理解しようとする。ここでは、英語表現を理解するために、置き換えをしようとしている状態と意味が理解できず混乱している状態が混在する。

### (2) 英語表現に慣れ、使ってみようとする状態

慣れ  
(表現の)比較  
違い  
真似る

自己表現

英語表現を何度か聞くことにより、表現やその内容を理解し、慣れてくる。ここでは、教師が話す英語を聞いて正しい発音を感じ取ったり、教師や友達の表現と自分の表現とを比較して、その違いを見つけようとしたりする。そして、聞き慣れた表現を真似て、「自分も英語を使って話してみたい」「自分のことを伝えてみたい」という自己表現への関心や意欲をもつ。

### (3) 英語表現や異文化、他者に対して関心や思いをもとうとする状態

選択 補充

(内容の)比較  
再構成  
他者理解  
自己理解

自分のことを表現しようとするときに言いたい表現と言える表現との差に気付き、必要な表現を獲得しようとする。また、言いたいことが伝わるように表現を選択、補充しようとする。

そして、コミュニケーション活動を通して、相手が使う英語表現にふれたとき、相手が表現する内容について自分と比較して理解し、友達への興味や思いをもとうとする(=考えや思いの再構成)。この意欲が他者理解や自己理解へと発展する。

## 3 受けとめ合いを通して見つめ直すための手だて

### (1) 学習内容の工夫(言語材料の選択)

興味・動機づけ

子どもにコミュニケーションの楽しさを味わわせるためには、英語表現への興味・関心が重要である。そこで、扱う言語材料は子どもにとって身近であり楽しさや意味を感じることができるものとする。子どもが日常生活でふれることが多いもの、他教科で学習する内容に関するもの、知的好奇心を喚起するもの、自己表現に関するものなど、子どもにとって興味・動機づけが起こるような言語材料の選択や学習内容を工夫する。

### (2) 基本表現の重視(Inputの重視)

Input  
繰り返し

体験的

子どもは英語を使ってみたいという意欲をもっている。そこで、その意欲を大切にしたいコミュニケーションを実現するために、基本的な英語表現を扱うことを重視する。基本表現を繰り返し Input することで英語表現への慣れをねらう。そのためには、ネイティブの英語を多く聞かせることが必要となる。歌やチャンツ、ゲームなど子どもの実態や発達段階に応じて楽しみながら自然に英語表現に慣れる方法を取り入れ、体験的に英語表現を Input していく。

また、教師や友達の英語表現を繰り返し聞かせることによって自分の英語表現との比較を行い、よさに気付き、自分の英語表現に生かすことができるようにする。

### (3) 目的に応じたグループ構成(楽しいコミュニケーション活動の工夫)

Output

満足感

Input した英語表現を Output へとつなぐためグループ構成を工夫する。その際には、英語表現の違いや表現する内容の違いを意識させるためなど、目的に応じたグループの人数や構成要素などに配慮して編成する。

また、「気付き」や「思い」をもたせたり、「言いたいことが伝わった」という満足感を感じさせたりするため、自己紹介やインタビューなどコミュニケーション活動の方法を工夫するとともに、自分と他者との比較から「気付き」や「思い」がうまれる題材を扱うなど活動内容の吟味をする。

### (4) 「気付き」や「異文化や他者への思い」の明確化(ふりかえりの視点)

シェアリング

共有・共感

「見つめ直し」  
の変容

「気付き」や「思い」を明確に意識させるためにシェアリングの場を設ける。シェアリングで、互いの「気付き」や「思い」をふり返ることにより、「見つめ直し」をねらう。個の発言を「見つめ直し」のモデルとして機能させ、「気付き」や「思い」を共有・共感させるために、ふりかえりの視点を明確にするとともに、学級やグループなどシェアリングの形態を工夫する。

また、ワークシートなどにより、学習のあしあとを蓄積することで、個々の「見つめ直し」の変容を明確にする。個々がどのような意識をもって学習してきたかを再認識させ、その質を高めていく。

#### 4 実践例

複式学級3，4年生の実践をもとに，手だてと子どもの姿について述べる。

##### (1) 学習内容の工夫（言語材料の選択）

###### ① 段階的な英語表現の配置

4月には「自己紹介をしよう」を行った。3年生12名が入学したばかりであり，互いのことをよく知らないため，互いのことを知ることに興味を示すと考えたからである。

単元では名前と家族紹介（father, mother, brother, sister, grandfather, grandmother）を予定していたが，第1時の活動で，“What is your name?” “My name is ....” の英語表現を扱ったところ，3年生の多くが“What is your name?” の英語表現に戸惑ってほとんど言うことができなかった。そこで，新しい単語を増やすと必要以上に混乱を招くと考え，単元計画を変更した。扱う単語を自分の名前と兄弟姉妹に限定し，その単語を使つてのコミュニケーションとした。第2時以降は，“Do you have brothers(sisters)?” “Yes, I do./No, I don't.” “I have a brother(sister).” などの表現を使いながら，「第2時 兄弟がいるか」「第3時 姉妹がいるか」「第4時 兄弟姉妹が何人いるか」をインタビューする活動にした。このように，徐々に英語表現を取り入れたことで，子どもは“Do you have brothers(sisters)?” を使えば，相手に兄弟がいるかを聞けることや“Yes, I do.” や “No, I don't.” と使つて答えられることに気付いていた。英語表現を繰り返し聞いたり話したりすることで，英語表現に慣れて，自分のことを伝えることができるようになった。

単元終了後の3年生のふりかえりには，「ちょっとむずかしかったけど 言い方が分かってちゃんと言えたのでうれしかったです」「いろいろなえい語をおぼえて，友達などに自こしようかいてきて楽しかったです 友達の名前もわかりました」「みょうじを さきに言つて名前を発表することがわかりました」といったものがあつた。徐々に英語表現に慣れ，使つてみたいという意欲が喚起されるとともに，「英語表現への気付き」が見られた。

###### ② 自己表現につながる言語材料

「あなたは～できますか Can you ... ?」では，自分ができることを伝え合う活動を行った。子どもにとって，友達に自分のできること（長所）を伝えることは，他から認められ自己肯定感が高まり，他者理解や自己理解につながる題材と考えたからである。



資料1 ビンゴシート

この単元では，eat, cook, do, play, make など日常生活で使われることの多い動詞と野菜，料理，スポーツ，楽器などの名詞を扱った。ビンゴゲームでは，ワークシートの25の枠に，身近なものや既習のものなどの絵を載せた。子どもはワークシート（資料1）の絵から，「将棋は英語でなんて言うのか」と疑問をもったり，「すしは そのまま sushi でいいはず」「ギターのときは，play のあとに the をつけないといけないみたい」など表現について確認したりしながら，質問したり答えたりしていた（写真1）。



写真1 ビンゴゲーム

ビンゴゲームでは扱う単語は教師が提示した。子どもは，25の単語がきっかけになり「ビンゴシートに出ていること以外にも自分のできることを言いたい（自己表現したい）」という意欲をもった。さらには，自分ができることを紹介する活動では，「自分が～できることを言いたい でも，英語での言い方が分からない」という思いをもった。「自己表現したい」という思いが，「英語での言い方（表現）を知りたい」という英語

表現獲得への意欲へとつながった。身近な単語をアクティビティの中にちりばめることで、子どもは、言ってみたいこと（内容）を見ついたり思いついたりして、表現しようとすると言える。

「誕生日を紹介しよう When is your birthday?」では、自分の誕生月の言い方を知った後、他の月の名前に慣れる学習をした。子どもは自分の誕生日を紹介したいという気持ちを持ち、英語表現を言えるようになろうとすると考えたからである。

授業では、第1時に月の名前、第2時に日の言い方（序数）をALTとともに繰り返し練習した。one, two, three と first, second, third など、数と序数の言い方の違いに戸惑っていたが、カレンダーを使った練習では、自分の誕生日を表す英語表現（序数）に注意して練習していた。また、第3時では、これまでに学習した月日の言い方を使って、互いの誕生日を質問し合う活動を行った。子どもは“When is your birthday?”に答える場合には、“My birthday is ...”に、月と日をあてはめればよいことに気付き、それまでに学んだ月や日の言い方を使って、自分の誕生日を答えていた。また、相手の答えを聞いて、「1月はJanuaryって言うんだ」「〜くんと〜くんの誕生日が同じでビックリした」という「英語表現への気付き」や「異文化や他者への思い」をもっていた。

このように、言語材料の工夫により「〜を言ってみたい」「〜を言うために、〜の表現をわかりたい」という意欲をもたせることができた。

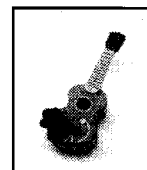
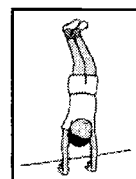
## (2) 基本表現の重視(Inputの重視)

### ① ALT TIME (ネイティブの英語表現にふれる場)

ネイティブの英語に慣れるため、WARM UPにALT TIMEを設けた。子どもはALTの話聞きながら、内容を理解しようとして、知っている単語から内容を探ろうとしたり、文脈を想像したりしながら集中して聞いていた。ALT TIMEの時間は1分程度から徐々に時間を延ばし、3分程度の話聞くこともあった。内容は単元に関するものに限定していたが、「誕生日を紹介しよう When is your birthday?」では、ALTが、1回目は誕生日の家庭での過ごし方、2回目はALTの誕生月(6月)に故郷で行われるお祭り、3回目は自分の誕生月の天候や遊びなどを紹介した。ここで扱う単語は、子どもがこれまでにふれたことがあるものや外来語とした。

ALTの話聞いた後に、聞き取れた表現や内容を発表する時間を設けたところ、子どもはALTの話から、“cake” “candle” “Strawberry festival”などの単語を聞いて、「ケーキ」「ろうそく」「イチゴ・祭り」などと日本語に置き換えて発表していた。一部の単語を聞き取れた子や概略をつかむことができた子など個人差はあったが、それぞれが聞き取った単語をつなげることで話の流れをつかませることができた。ネイティブの英語表現を十分に聞かせることは、「英語表現への気付き」のために重要となる。

また、非言語による表現も理解のためには大切であると考え、「あなたは～できますか Can you ...?」では、ALT TIMEにピクチャーカード(資料2)を取り入れた。子どもは、ピクチャーカードを見ながら、「先生、さかだちできるの?」「ウクリレ?ウクレレ?」などと反応しながら、初めてふれるhandstand, ukuleleなどの単語の意味や発音に気付くことができた。「英語表現への気付き」には、視覚的情報を取り入れることが有効であった。



資料2 ALTのできることを紹介したピクチャーカード

## ② 楽しみながら英語表現に気付く（慣れる）アクティビティ

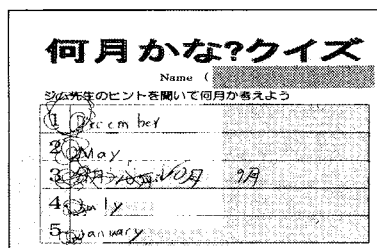
「自己紹介をしよう」の第1時では、相手の名前を聞いたり自分の名前を答えたりする表現に慣れるために自己紹介ウォーキングを行った。これは、互いの名前を聞き合っ、名刺カードを交換する活動である。3年生と4年生での学年差を考え、使用する表現を“What is your name?”と“My name is ... .”の二つに限定した。

カード交換をする活動にしたことで、自分のカードを友達にたくさん渡そうと積極的に相手を見つけて、何度も“What is your name?”と“My name is ... .”の会話をしていた。ただ、3年生には“What is your name?”という表現が難しく、はっきり言えない子どもがいたため、言えていない子にはその場で担任やALTが英語表現を聞かせた。子どもは、教師が発話する英語表現を真似しながら、“What is your name?”とすることができた。

教師と子どものかかわりにより英語表現に気付くことはできていたが、それだけではなく、4年生が3年生に手本を示すなど、子ども同士のかかわりを取り入れることでも、英語表現に慣れることができたのではないかと考えた。



写真2 月カルタとり



資料3 何月かな?クイズ  
ヒントを聞いて立てた予想

「誕生日を紹介しよう When is your birthday?」の第1時には、月の表現に慣れるためにカルタとり(写真2)とクイズを取り入れた。カルタとりでは、月の名前をチャンツで練習した後に行った。子どもは相手よりも早くカードを取ろうとALTの英語表現を集中して聞いていた。ALTがJune, July, Januaryなど発音が似ている月を出題すると、お手つきをする子どもがいた。お手つきした後は、二人で発音を確認し合っている姿も見られた。こうして、繰り返し英語表現を聞くことで、発音の違いに気付き、区別がつくようになった。

また、ALTのヒントから何月かをイメージするクイズも行った(資料3)。子どもは、ヒントをもとに「pumpkinはカボチャだからハロウィンの10月じゃない?」「reindeer って何?全然分かん」 「Christmasなら10月じゃなくて12月だ」など互いの知っている知識を出し合いながら答えを考えていた。

## (3) 目的に応じたグループ構成 (楽しいコミュニケーション活動の工夫)

### ① 英語表現への気付きのためのグループ構成

「あなたは～できますか Can you ... ?」の第3時では“I can ... .”と“Can you ... ?”を使ったコミュニケーションを行った。自分のできることを伝えるだけでは一方的であり、相互理解にはつながらないため、自分のことを伝え、相手はどうなのかをたずねるコミュニケーションになるようにした。

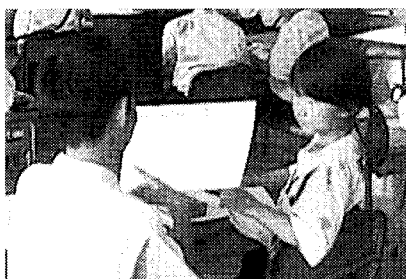


写真3 異学年でのコミュニケーション  
4年生が3年生に教えている姿

この活動では、1回目に異学年ペアを取り入れた(写真3)。4年生のほうが英語学習の経験が豊富であるため、3年生に教えてあげたり、3年生にとって4年生の表現が手本になったりすると考えたからである。一部のペアでは4年生が3年生に英語表現を教えていたが、期待したほどの活動にはならなかった。原因として、教え合う必要感や

表現を見つめ直す必要感が子どもになかったということが考えられる。「ペアで練習しよう」という指示にするなど、グループ活動の目的を子どもに明確に伝える必要があった。

### ② 友達（他者）のことを知ろうとするコミュニケーション

相手への新しい発見をねらって2回目は同学年グループでの活動とした。同学年グループでは異学年ペアよりも積極的に英語を使って聞き合うことができていた。

4年生のグループでは、“Can you play soccer?”という男子からの問いかけに、“No, I can't.”と答えた女子に対して、他の子が「～さん、ちゃんとサッカーできるとよ」と言う場面があった。サッカーが得意な男子から聞かれたことで、その女子は、相手と自分とを比べ、自信をもって“Yes, I can.”と答えられなかったと思われる。しかし、自分ではできていないと思っていたことをまわりの子から認められたことで、その子はうれしそうな表情を見せていた。3年生のグループでは、異学年ペアで自分のできることを言えなかった子が、できることをはきはきと言い笑顔で答える姿が見られた（写真4）。また、“Can you ...?”の質問に答えられない相手にグループの他の子が答え方を教える姿も見られた（写真5）。



写真4 同学年でのコミュニケーション

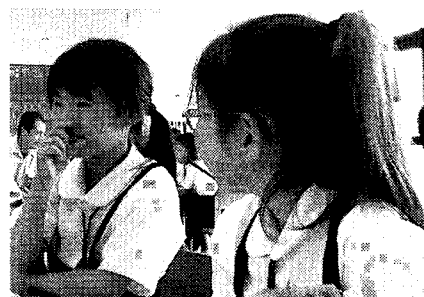


写真5 同学年グループ  
答え方が分からず戸惑っている子に教えている様子

1回目に表現を学んだことや2回目は自分のできることを言いやすい雰囲気であったことで、互いのことを知ることができたと考える。今後も、自分のことを伝える活動を多く取り入れることで「伝わった」という満足感を味わわせていきたい。

### ③ グループでの共同作業

「あなたは～できますか Can you ... ?」の第4時では、「Who am I?」クイズを行った。問題作りでは、四人チームで互いのできることを英語で伝え合い、グループから誰のことを出題するかを考えた（資料4）。子どもは、難しい問題を作ろうという意識があったため、互いのできることを出し合って意外性のある問題にしようとしていた。「わたしが～できることをみんなは知らないだろう」という思いをもって問題作りをすることができていた。また、クイズでは、ヒントを聞いて誰のことかを答える活動を行った。子どもは「～ができるのは、～さんだろう」「～さんは、～ができるのかな」という予想をしながら答えを相談していた（資料5・写真6）。予想をもとに聞いていたため、正解を聞いたときは、「えーっ」「～さん、そんなことできるの」と声をあげ、友達の特技やできることに驚いていた。

グループで問題を作ったり、予想を立てたりする活動を通して、子ども同士が互いのことを英語で表現していた。自己表現や他者理解の必要感があったと言える。

その一方で勝敗のみに意識が向き、他者のことを自分と比較しながら理解しようとする気持ちが希薄な子どもも見られた。友達のことが分かったという楽しみを味わえるコミュニケーションになる工夫をする必要があった。

I can ...	できること (日本語で)	英語ではなんというの?
1	トランポリンが得意	I can do trampolines.
2	百人一首歌が得意	I can do 100 songs.
3	テニスが好き	I can play tennis.
4	英語が得意	I can play table tennis.

資料4 グループでの問題作り

グループの予想	～さん	結果
1	田中さん	×
2	山田さん	○
3	鈴木さん	×

資料5 グループでの予想



写真6 グループで予想を話し合う姿

#### (4) 「気付き」や「思い」の明確化（ふりかえりの視点）

##### ① シェアリングの設定による「気付き」や「思い」の共有

###### ア「英語表現への気付き」

「あなたは～できますか Can you ... ?」の第1時では、「I can ... .」“I can't ... .”の表現についてのふりかえりを行った。シェアリングに入る前に、課題<「できる」「できない」の言い方を知ろう>を確認し、課題について気付いたことを話すということを伝えた。子どもの発言には「can と can't の発音がびみょうだったので難しかった」「あまりわからなかったけど、だいぶ覚えられました『できない (can't)』は『できる (can)』より（文字数が多く）長いと思いました」「できる できない を聞き分けるのが難しかった」「できる できない の言い方が少しわかった」といったように、音声の違いについてふりかえりをしたものがあった。一方で、「(クイズのヒントを) みんなで聞いて どんなふうに英語を聞き取るかわかりました」といった感想を述べる子もいた。また、「もっとやってみよう」「わたしだったら どういうふうに言えるかなと思った」など学習への意欲を示す子もいた。新しい表現にふれたり気付いたりすることで、たくさん子どもが自分の感想を発表することができた。しかし、「英語表現への気付き」に焦点化するためには視点をもっと明確にする必要があった。

###### イ「異文化や他者への思い」

「あなたは～できますか Can you ... ?」の第3時では、<できることを紹介し、友達と自分を比べよう>を課題とした。この時間のシェアリングでは、友達のできることを聞いて思ったことについてのふりかえりをした（写真7）。

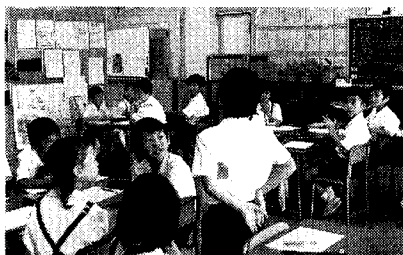


写真7 他者への思いを発表する子ども

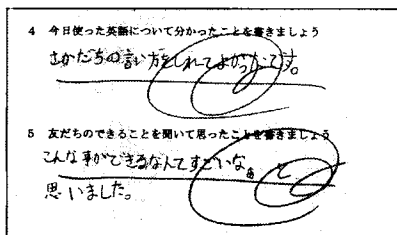
「Aさんがピアノを弾けるのが知らなかった びっくりした」「Bさんがトランポリンをできると知ってビックリした」といった驚きや「友達が（わたしが）思っていたことと違うことができるって聞いてびっくりしました」「ぼくができることを 友達もできるとわかりました」「自分と同じだなあと思いました」など自分との比較、さらには「いろいろな人のできることを聞いてよかった も

っと知りたいです」という次の学習に意欲を示す発言があった。

相手について知ったことを自分と比べながら、友達のことを理解する（他者理解）ことができていた。

##### ② ワークシートにおけるふりかえりの視点の明確化

学習後には、ワークシートでのふりかえりを行った。4月当初の「自己紹介をしよう」には、「すごくはずかしかったけど言えてよかった」「とてもきんちょうした」「たのしくてよかった」「ふくしきのみんなとお話できてうれしかった」などの感想が書かれていた。これは、ふりかえりの視点があいまいであったためである。そこで、「英語表現への気付き」や「異文化や他者への思い」を意識させるワークシートを工夫した。



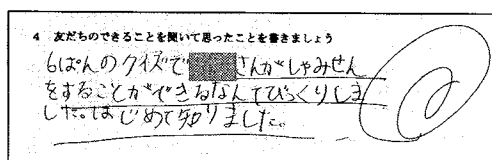
資料6 英語表現の気付きのふりかえり

「あなたは～できますか Can you ... ?」の第3時では、「英語表現への気付き」を意識させるために、授業でふれた英語表現についてわかったことを記入する欄を設けた

(資料6)。子どものふりかえりには「can や can't の使い方や『中国語をしゃべれる』などの言い方が分かった」「(言いたいことの) 言い方がわかった」「Can で聞かれたら、can を使って答えることがわかった」「アイ キャン が自分は何ができます ということがわ

かった」「さかだちの言い方を知れてよかった」「can と can't の区別が難しかった」「ギターとか楽器に『play the』がつくと分かりました」といったものが見られた。

また、「あなたは～できますか Can you ... ?」の第4時では、「異文化や他者への思い」を意識させるために、友達のできることを聞いて思ったことを書く欄を設けた。子どもは「友達がこんなことが出来るとわかってビックリした」「Cさんはテニスができると聞いて、Cさんも（ぼくと同じで）できるんだなと思った」「Dさんは、バタフライができないってことを知らなかった みんな出来ること、出来ないことがあるんだな」などと自分と友達とを比較してふり返ることができていた（資料7）。



資料7 異文化や他者への思いのふりかえり

授業で意識させたいことをワークシートに項目立てることで、子どもは視点にそって「英語表現への気付き」や「異文化や他者への思い」をもつことができるようになった。

## 5 成果と課題

### 成果

- 扱う英語表現を徐々に増やすことで無理なく英語表現に慣れ、互いに慣れた表現を使った受けとめ合いが成立した。また、その言語材料に、自分のことを言いたいという気持ちに発展するものを選択することで「言い方が分からない、だから知りたい」という意欲が生まれた。
- 英語表現の Input のためには、アクティビティの活用が有効である。ゲーム的要素があるアクティビティにより英語表現を集中して聞こうとする態度が生まれる。また、目的に応じてグループ活動を取り入れることで協力して英語を活用しようとする気持ちをもっていた。
- 自己表現につながる学習内容の工夫により、子どもは「伝えたい」という意欲を強くもつ。これが英語表現への関心につながる。自分の伝えたいことを考える活動を取り入れることで、真のコミュニケーションとなる。自己表現のコミュニケーションでは、本当に伝えたいことをやりとりするので「英語表現への気付き」「異文化や他者への思い」が生じた。
- 「英語表現への気付き」や「異文化や他者への思い」を共有・共感する場として、視点を明確にしたシェアリングの時間を設けることは、コミュニケーションから自分へ立ち戻るために必要である。他のふりかえりを聞くことで、自分の「見つめ直し」が起こった。

### 課題

- ネイティブの英語表現にふれることは、英語表現を理解しようとする意欲をもつためには必要である。子どもの実態にあった英語表現との出会いが不可欠であり、そのために、子どもの実態把握が重要となる。
- 異文化や他者への思いをもつ場ではグループ活動が有効に働いた。一方、子どもだけの力で新たな英語表現を獲得することは難しい。「見つめ直し」にグループ活動を取り入れるメリットとデメリットをさらに吟味し、効果的な場や構成を探っていく必要がある。
- ふりかえりでは、視点を明確にするようにしてきたことで「英語表現への気付き」や「異文化や他者への思い」を意識させたが、シェアリングの場で互いの「気付き」や「思い」を共有・共感することが不十分であった。シェアリングの形態や人数などを今後も工夫していきたい。